昭和五十四年二月二十五日　郷土史資料

第九十二回

史跡めぐり資料

国分寺　薬師堂
国分寺万葉植物園
文化財保存館
武蔵国分寺跡
大国魂神社

越谷市郷土研究会
日置宗一

第九十二回　史跡めぐり案内

一、日　時　二月二十五日　日曜日

一、集　合　南越谷駅前　午前九時　一〇分
　　午前九時三十四分発　府中本町駅行　乗　車

一、行　先　西国分寺駅下車
　　八幡社
　　薬師堂　現国分寺〜　国指定重要文化財　木造薬師如来座像
　　国分寺万葉植物園
　　文化財保存館
　　武蔵国分寺跡
　　府中　大国魂神社

一、帰　路　府中本町駅〜　南越谷駅　下　車　解　散

一、会　費　壱千壱百円也　但し、昼食は各自持参の事。

以上

国分寺市

国分寺の市制施行は、昭和39年11月。東京都のほぼ中央部、小金井市の西に隣接する住宅地としての都市で、明治22年近郷の11ヶ村が合併して、国分寺村となり、昭和15年町制施行、昭和39年11月市制施行した。国電中央線が通じ国分寺駅からは、南に下河原線、北に西武多摩湖線・国分寺線が分岐する、又西国分寺駅には国鉄武蔵野線が交差する。

市域は武蔵野台地の一部を占めるが、南部を東西に、国分寺崖線と呼ばれる段丘崖が走る。此の南崖下に、天平13年（七四一）武蔵国分寺が建てられた。市名の起源も之に依る。今では礎石が残るのみだが、此の付近崖下の湧水をもとに成立した国分寺本村がある。水に恵まれた南部に比べ、北部武蔵台地面の開発は遅れた。新田集落が開かれたのは、享保年間（一七一六〜三六）になつてからである。

明治に入ると同22年に甲武鉄道、同27年〜28年に川越鉄道（現西武国分寺線・新宿線）が通じたが、村の経済の中心は、大麦、小麦、甘諸を主産物とする農産物だつた。近郊農村として疎菜栽培が始まつたのは、大正の関東大震災以後で、住宅地も増えて来たが、宅地面積は全体の9・6％程度であつた。

住宅都市として急速に発展したのは、第二次大戦以後の事である。此の町の見処としては、史跡国分寺跡や、万葉植物園がある。

八幡社

八幡社は、薬師堂の西隣にある。此れは、諸国の例にある、国分寺八幡社である。もと薬師堂の東南方にあつたものを、現在地に移したものである。

国分寺

国分寺は、武蔵国分寺の講堂跡より北にある。山号は、医王山最勝院と云う。

元弘三年（一三三三）新田義貞が鎌倉を攻めた際に、府中分倍河原で戦つた時、旧国分寺の御堂・其の他の全部を焼失してしまつた。義貞は其の二年後、黄金三百両を寄進して、之より小さな御堂（薬師堂）が再建され、薬師像が安置された。此の頃から、之の寺は国分寺としての性格を失つて、一地方寺院としての様相を呈し始め、寺号も「医王山最勝院国分寺」を唱えるようになつた。然しながら、明確なる寺歴は不明である。くだつて天正十八年（一五九〇）徳川家康が関東に入部すると社寺の保護を図り、国分寺も寺領九石八斗を与えて朱印寺とした。

江戸中期の享保元年（一七一六）には、木曽の商人泉屋吉三郎が私財を出して、朽ちた薬師堂を修理した事が記録に見える。次いで、享保十八年頃に国分寺本堂を建立した。

然し乍ら、本堂・仁王門・本坊・薬師堂など

現在のものに近い寺観に改められたのは、二十二年後、宝暦六年（一七五六）十五代賢盛が新たに薬師堂を建立したにより現在の如くなったと云はれている。

真言宗　医王山　最勝院　国分寺
仁王門　建武二年造立　礎石は古い石材使用
仁王像　伝　運慶作　丈　二メートル余

薬師堂

国分寺々内、旧金堂跡の北方に現在の薬師堂がある。岡の中腹にある仁王門を過ぎ、更に石段を上ると、正面が薬師堂である。

堂宇は、約十二メートル四方で、単層寄棟造り、周囲に勾欄付の廻廊をめぐらす。宝暦五年の建造であるが、之も礎石は旧石材を用いている。

堂内正面に、国分寺の正式名「金光明四天王護国之寺」の額がかかっている。内陣に極彩色の厨子、其の中に、本尊　伝行基作　国指定重要文化財で、木彫寄木造り、丈　一・七六メートルの、薬師如来座像を安置する。

此の薬師如来座像は、平安末期か鎌倉初期と認められるが、作者は明らかではない。元弘三年の兵火にあつて金箔は、ほとのど剥がれて黒漆の部分が多い。「閑武蔵国分寺にあつたものと云はれる。

万葉植物園

国分寺境内に国分寺万葉植物園がある。万葉集は、国分寺が建立された頃、詠まれた歌を集めたものであるが、其の中には、歌人達が植物に託して其の心を歌つたものが多く納められている。

前国分寺市長であり、此の寺の住職でもある、星野亮勝氏が之等の植物を通じて、万葉人の心や生活などを偲ぶ一助としてと願つて集められたのが此の植物園である。

昭和二十五年から三十八年までの十三年間を費やし独力で同市内や八王子・五日市・御岳山高尾山・多摩丘陵・青梅・狭山・武　町・埼玉県・奈良県等へ出向いて集めたものである。ノミクサ・ムラサキ草など、百六十三種の草花が植栽されてをり、万葉植物には各々植物名・繁植地・万葉例歌と作者を書いた、票識が立つている。また造園の際には、本田正次東大名誉教授や、ハス博士故大賀一郎氏らの協力を仰いだという。園内八〇〇〇平方米、花の見頃は、四月五月頃・入園無料である。

文化財保存館

植物園内にある、文化財保存館には、国分寺跡より出土の多数の古瓦、同市内で発掘された石器や縄文時代の土器など、約六百点を展示し

徳川家光の朱印状などの古文書記録類も展示してある。

武蔵国分寺尼寺跡

武蔵野線国鉄の西側に、武蔵国分寺尼寺跡がある。未調査のうちに、附近が宅地化してしまい、其のほとんどが不明である。

武蔵国分寺跡

武蔵国分寺は、今から一千二百年ほど前の聖武天皇の頃に建てられたものである。

武蔵野の段丘を背にした、南傾斜地にある。大正十一年十月、国の史跡に指定された。杉・松赤松などが茂り、渓水に恵まれた、約五千平方米の斜面には、金堂跡・講堂跡の直径二米近い巨大な礎石が、残されている。

続日本書紀によると、天平三年（七四一）三月の頃に、国分寺建立の詔が記されている。

其の頃全国的に災害が相次ぎ、疫病が流行して多くの人が亡くなつたり、悪天候による凶作が続いた。当時は、此の様な混乱の際に、頼るものは神仏しかなかつたので、時の聖武天皇は各国ごとに、寺院を作る事を考えられ、国分寺創立の詔勅が発布された。此の詔勅に基き、諸国は、僧二十人を置く僧寺（金光明四天王護国之寺）と、尼十人を置く尼寺（法華滅罪之寺）を建立する事にたつた。

詔勅の中には、国分寺の立地条件として、国府から近い事。人家の雑踏から離れる事、又一方、人が集まるのに、不便でない事。水害等の憂いが無く、長久的に安穏の場所、等となつている。

当時武蔵国府は府中に置かれていた為、前記の諸条件を満たす場所として、此の地が選ばれたものである。即ち、此処には、南は府中に連なり、国府に近く、北に低い丘陵を負い、随所に湧水があつて、住居に適し、又川に離れている為、水害の危険も無く、条件にかなつたものと思われる。

武蔵国分寺は、聖武天皇の、天平十三年（七四一）、勅願によつて諸国に建立された国分寺の一つで、其の建立は六十数ヶ国にわたるものである。

寺域は、現在の国分寺市西元町一丁目から四丁目にわたる地域に建てられたが、此の地は、北に低に丘陵があり、南は府中につらなり、尚随所に湧水があるという好適地であり、これらを含む広大なる地域で、数次にわたる調査の結果、尼寺を含む全域は、東西に横八八〇メートル、南北に縦五五〇メートルに及び、僧寺地域だけでも縦横三三〇メートルあつたものと見られている。

此れは、全国の国分寺中で、最も規模の大きなものであつた。当時、政治文化の中心地であつた京畿に比べ、武蔵の国は東国の果ての国で

あり、文化においても、財力においても遅れた所に、何故全国一の大規模な寺院が造られたものか謎とされている。

堂塔は、野原の中に散在する礎石から、北院・中院・講堂・金堂・中門・七重塔・鐘楼・及び僧坊からなり、又、尼寺は尼坊・講堂・金堂であったと推定されている。

当時の国力からすると、想像もつかぬほど巨大な財力と人力を投下して造営された国分寺は荘大な七堂の伽藍を整えて古都の偉容を示したが、其の維持と管理には、又莫大な費用を要し平安中期の延喜式主税帳によると、武蔵国の正税（税額）は稲で四十万束、其の内国分寺料として五万束が使われている。

寺を代表する七重塔は、「続日本後記」によると、承和二年（八三五）に落雷で焼失、十年後に男衾郡の富豪壬生吉志福生が再興した。

鎌倉幕府政権樹立後、頼朝の命により、建久五年（一一九四）修理が行われた。然し壮大な此の寺も、元弘三年（一三三三）新田義貞が鎌倉の執権北条高時と分倍河原（府中市）で戦った時、其の戦火を浴びて、御堂総てを焼失してしまった。

新田義貞は、其の二年後に、黄金三百両を寄進して之より小さな御堂を（薬師堂）を再建し薬師像が安置された。此の頃から、寺号を「医王山最勝院国分寺」と唱える様になり、国分寺としての性格を失って、一地方寺院となった。

真姿の池

武蔵国分寺跡の域内に、真姿の池の云うのがある。喜祥元年（八四八）の頃、絶世の美人と云はれた「玉造の小町」は、ライ病にかかって顔立が尋られぬ様になってしまった。小町は、くづれた容貌を直す為、国分寺薬師堂に祈った。七七日の願の最後の日、一人の神童が現われ、小町を国分寺に近い泉の池に案内して「此の池の水で顔を洗え」と云って姿を消した。小町はその通りにすると、見悪い顔が元のままになおったという。其れから此の池を、真姿の池と云う様になり、真姿弁天の小祠は小町が建立したものだという。

今は、鯉などが飼はれて、池がよごれ、昔の美しい泉池を偲ぶ事は出来ない。

府中市

昭和二十九年四月、市制施行。人口十六万九千六百人（昭和49年）、面積29・9平方米、鉄道は、南部線分倍河原（京王線連絡）・府中本町（武蔵野線連絡）、下河原線北府中・東京競馬場前、西武多摩川線多摩墓地前・北多摩・是政、京王線分倍河原・武蔵野台・東府中、武蔵野線府中本町の各駅がある。

都のほぼ中央部に位置し、東は調布市と三鷹市、北は小金井・国分寺の両市、西は国立市にそれぞれ接し、南は、多摩川を隔てて、多摩・稲城市と対している。昭和29年4月、府中・多摩・西府の一町二ヶ村が合併、府中市となった。

市域南部は、多摩川沿岸の低平地、北部は、海抜50～60米の武蔵野台地である。

市名は、大化元年（六四五）、武蔵国の国府が北部台地上に置かれた事に由来する。其の規模は、八八〇米四方と推定されている。構内には本庁舎・附属施設が建ち並び、街には、条坊が設けられていたと云う。歴代の国司の中には源信・藤原秀郷・平賀義信・足利尊氏などが著名である。

鎌倉時代には、鎌倉と北関東を結ぶ、鎌倉街道の宿場として発展したが、元弘三年（一三三三）新田義貞と北条康家が戦った分倍河原の合戦、正平七年（一三五二）新田義興と足利尊氏との人見ヶ原の合戦など、度々の戦に戦場となり荒廃。江戸時代に入って、甲州街道の整備後再びその宿場町としての繁栄を取りもどした。街道沿いには民家が建ち並んで、街道町の形態を呈し、此の地方の商業活動の中心地ともなって、毎月1・7日には、六斎市も開かれた。

近年、都心との便も良い処から、ベットタウンとして、宅地化が急速に進められている。

見どころとしては、大国魂神社、天然記念物の欅並木、桜の見事な多摩墓地、東京競馬場などがある。

大国魂神社

景行天皇の41年5月5日、武蔵国魂として大国魂神社を祀ったのが始まりと伝える古社である。大化年間（六四五～四九）、武蔵国国府が開設されると、其の斎場となり。

大国魂神社の境内は四千二百二十平方米。大和朝庭は国家の政治行政を確立きせる為、国衙地に、国内各地に古来から、信仰されていて、各郡に祀られている各社を、集めて祭祀した。

武蔵国では、府中の国衙地に、武蔵国各郡の村落が、祭祀していた四十四社を総合して、其れを又、六社に統合して集合祭祀した。此れが、武蔵国六所宮である。

此の様にして、武蔵各地域内に、発達して来た豪族文化の代表とみなされる、各祭神

を、集合させたと云う事は、国司が豪族神を巡拝する儀式が、簡素化された事と同時に、地方民が、国府政権に協力する政治行政の体制を、整えた事にも、大きな意義があつた。

統合祭祀された神社は、各地方や地域の有力な土豪が、永く祀つていたものである。国内六所の神社より移社されたどの祭祀場所も有力な豪族の支配地と一致する。

一ノ宮	小野神社	南多摩郡多摩村
二ノ宮	小河神社	西多摩郡東秋留
三ノ宮	氷川神社	北足立郡大宮市高鼻
四ノ宮	秩父神社	秩父郡秩父
五ノ宮	金鑽神社	児玉郡神川村
六ノ宮	杉山神社	郡内二十余ヶ所不明

一、景行天皇四十一年五月五日武蔵大国魂の宅宣による、「武蔵総社誌より」

二、成務天皇の時、天穂日命の裔兄多毛比命が大已貴命を崇信して、宮社を造宮し、其の祖素盞嗚命を祀り、此の御柱を国霊大神と崇め、代々の国造が奉仕する。「新選総社伝記」

歴代領主の尊崇も厚く、江戸時代に入ると、天正十九年（一五九一）徳川家康が、五百石の社領を寄進、慶長15年（一六一〇）には、大久保石見守長安に命じて、本殿・拝殿・楼門等を修営させた。後正保三年（一六四六）の府中大火で類焼したが、四代将軍家綱が、寛文七年（一六六七）、久世大和守を普請奉行として、再建している。明治八年官幣小社に列し、現社号に改められた。

寛文年間（一六六一～七二）建立の本殿は、都指定の重要文化財。建坪は、88平方米、流れ造りの、三つの建物を横に連絡した相殿造り、外部には朱塗りを施し、木材には、杉・桧が用いられている。

社宝としては、国指定の重要文化財、木造狛犬一対（鎌倉期、伝運慶作）と、重要美術品指定の古鏡四面・古写本三種、木像仏像五体などが、収蔵されている。徳川家康が寄進した馬場の跡である社前の欅並木は、国の天然記念物に指定されている。

毎年五月五日に、行なわれる例大祭は、古くから「府中のくらやみ祭り」として知られており、馬にまたがつた宮司が、欅並木に置かれた的をめがけて矢を射る。流鏑式などもあつて、30万人近い人出でにぎわう。

祭神　大国魂命

重文　木造狛犬一対

以上